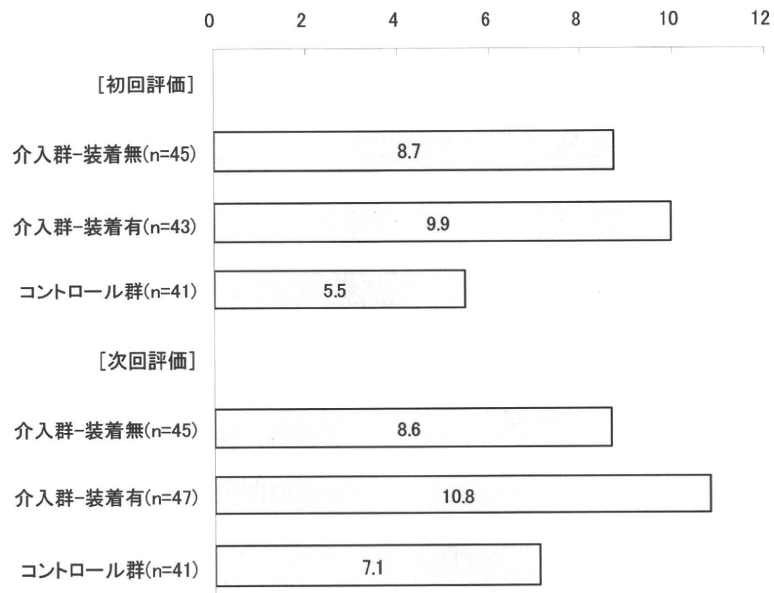


図表 2.5.3 最長発声持続時間（秒数、平均）



図表 2.5.4 最長発声持続時間（秒数、平均） —介入群前後比較—

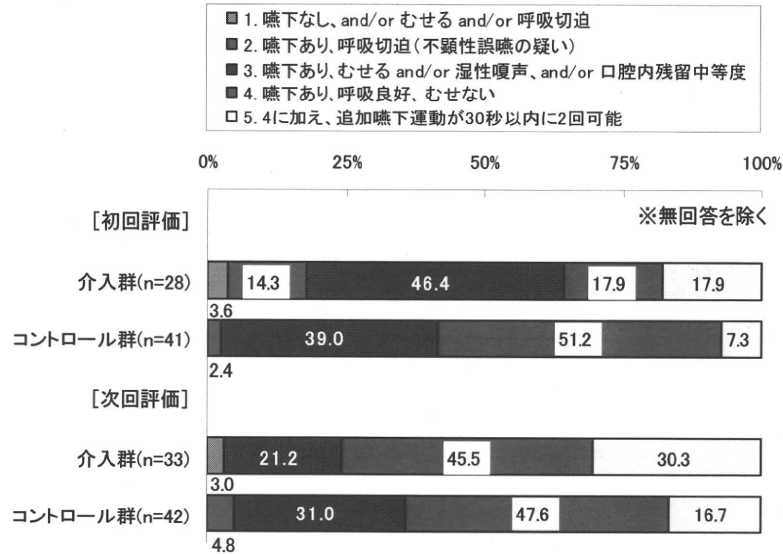
	[初回評価] 装着有	[次回評価] 装着無	[次回評価] 装着有
[初回評価] 装着無	有意差あり (P=0.012)	有意差なし	有意差あり (P=0.0022)

## 6) フードテスト (口腔相の評価)

フードテストにおいては、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差 (P=0.001) がみられた (図表 2.6.1、2.6.2)。

したがって、フードテストでは、補助具の継続的な使用に改善の傾向がみられた。

図表 2.6.1 フードテスト



図表 2.6.2 フードテスト - 介入群前後比較 -

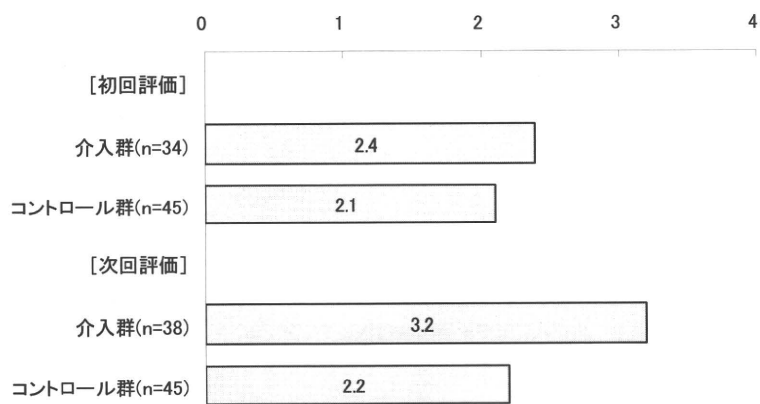
	[次回評価]
[初回評価]	有意差あり (P=0.001)

## 7) RSST (咽頭相の評価)

RSST (空嚥下の回数) においては、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差 ( $P < 0.01$ ) がみられた。(図表 2.7.1、2.7.2)

したがって、RSSTでは、補助具の継続的な使用に改善の傾向がみられた。

図表 2.7.1 RSST 空嚥下の回数 (平均)



図表 2.7.2 RSST 空嚥下の回数 (平均) — 介入群前後比較 —

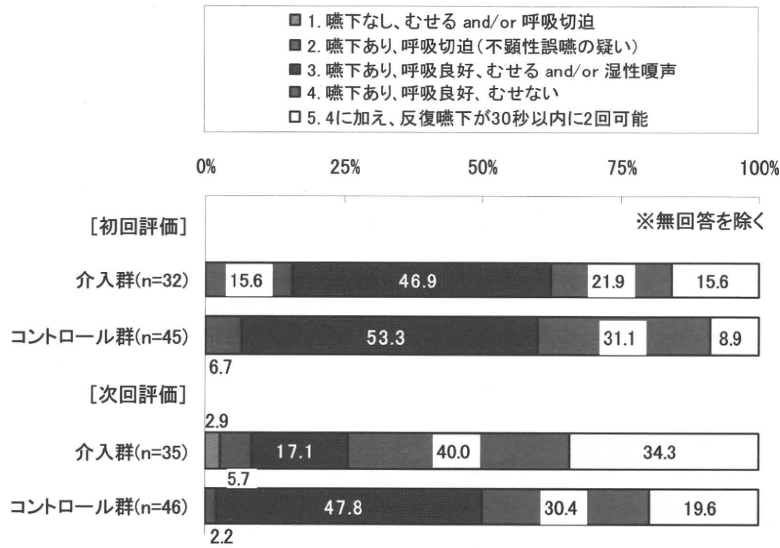
	[次回評価]
[初回評価]	有意差あり ( $P < 0.01$ )

### 8) 改訂水飲みテスト (咽頭相の評価)

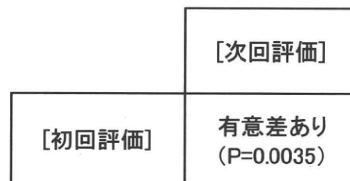
改訂水飲みテスト (咽頭相の評価) においては、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差 (P=0.0035) がみられた (図表 2.8.1、2.8.2)。

したがって、改訂水飲みテストでは、補助具の継続的な使用に改善の傾向がみられた。また、初回評価におけるブローイング秒数が有意に影響しており (P=0.0255)、なかでも、「5~10 秒未満」が最も改善に寄与しているといえる (図表 2.8.3)。

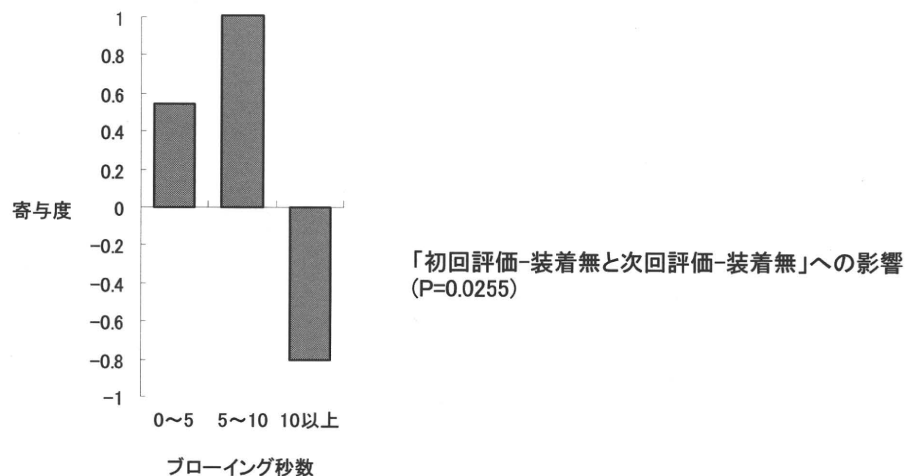
図表 2.8.1 改訂水飲みテスト



図表 2.8.2 改訂水飲みテスト - 介入群前後比較 -



図表 2.8.3 改訂水飲みテスト - 初回ブローイング秒数での検証 -



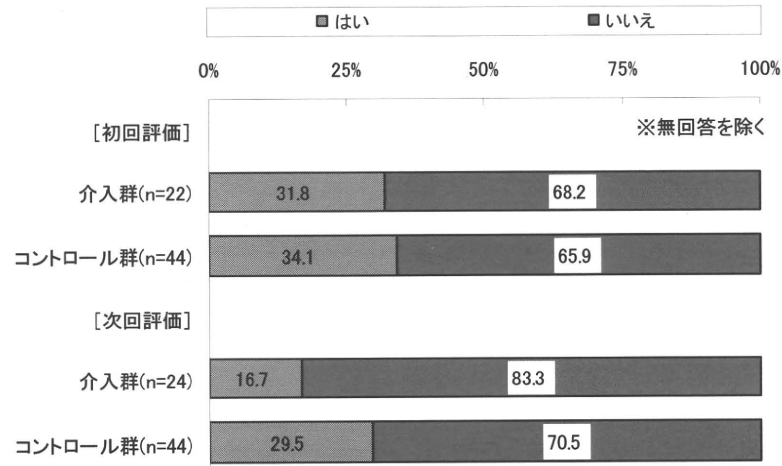
## 9) 聴診（誤嚥の評価）

### ①呼吸音の変化（泡立ち音など）を確認した

呼吸音の変化においては、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差はみられなかった（図表 2.9.1、2.9.2）。

したがって、呼吸音の変化では、補助具の継続的な使用に改善の傾向はみられなかった。しかしながら、初回評価におけるブローイング秒数が有意に影響しており（ $P=0.0431$ ）、なかでも、「5秒未満」が最も改善に寄与しているといえる（図表 2.9.3）。

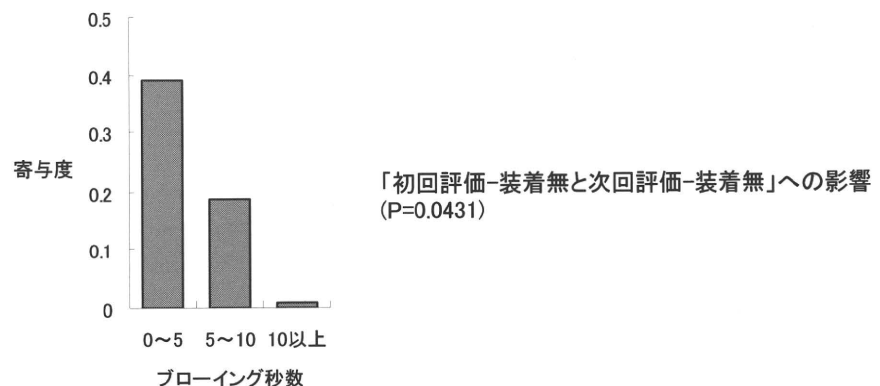
図表 2.9.1 聴診 ①呼吸音の変化（泡立ち音など）を確認した



図表 2.9.2 聴診 ①呼吸音の変化（泡立ち音など）を確認した —介入群前後比較—

	[次回評価]
[初回評価]	有意差なし

図表 2.9.3 聴診①呼吸音の変化 —初回ブローイング秒数での検証—

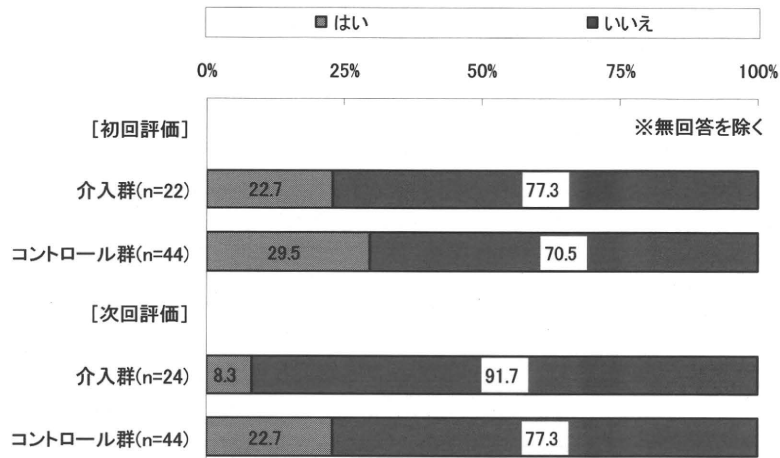


②呼吸リズムの変化（乱れ）を確認した

呼吸リズムの変化においては、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差はみられなかった（図表 2.9.4、2.9.5）。

したがって、呼吸リズムの変化では、補助具の継続的な使用に改善の傾向はみられなかった。

図表 2.9.4 聴診 ②呼吸リズムの変化（乱れ）を確認した



図表 2.9.5 聴診 ②呼吸リズムの変化（乱れ）を確認した —介入群前後比較—

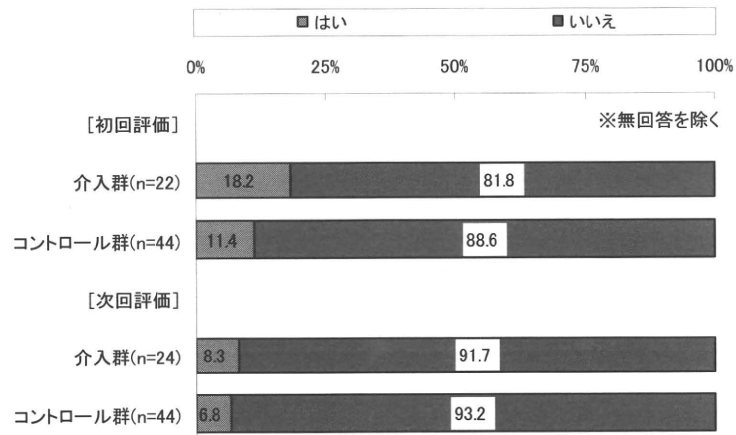
	[次回評価]
[初回評価]	有意差なし

### ③呼吸音の高低の変化を確認した

呼吸音の高低の変化においては、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差はみられなかった(図表 2.9.6、2.9.7)。

したがって、呼吸音の高低の変化についての聴診では、補助具の継続的な使用に改善の傾向はみられなかった。

図表 2.9.6 聴診 ③呼吸音の高低の変化を確認した



図表 2.9.7 聴診 ③呼吸音の高低の変化を確認した —介入群前後比較—

	[次回評価]
[初回評価]	有意差なし

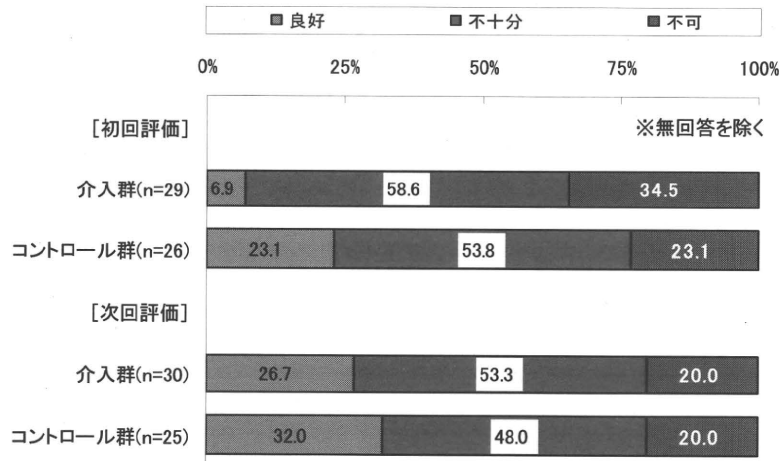
10) 嚥下造影検査 (VF)

① 鼻咽腔閉鎖

VF ①鼻咽腔閉鎖では、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差 (P=0.0011) がみられた (図表 2.10.1、2.10.2)。

したがって、VF ①鼻咽腔閉鎖では、補助具の継続的な使用に改善の傾向がみられた。

図表 2.10.1 VF ①鼻咽腔閉鎖



図表 2.10.2 VF ①鼻咽腔閉鎖 一介入群前後比較一

	[次回評価]
[初回評価]	有意差あり (P=0.0011)

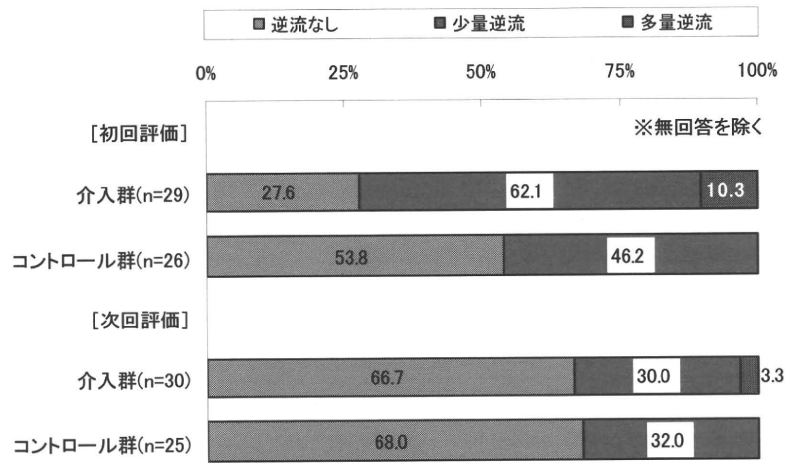


## ②鼻咽腔逆流

V F ②鼻咽腔逆流では、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差 ( $P < 0.0001$ ) がみられた (図表 2.10.3、2.10.4)。

したがって、V F ②鼻咽腔逆流では、補助具の継続的な使用に改善の傾向がみられた。

図表 2.10.3 V F ②鼻咽腔逆流



図表 2.10.4 V F ②鼻咽腔逆流 ー介入群前後比較ー

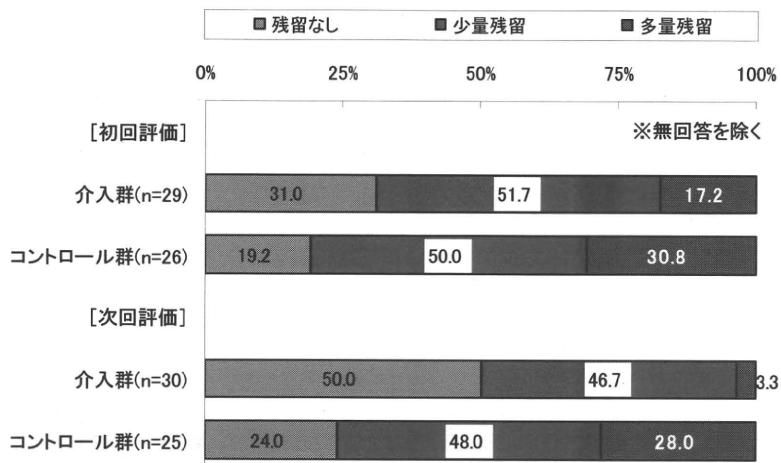
	[次回評価]
[初回評価]	有意差あり ( $P < 0.0001$ )

### ③口腔内残留

V F ③口腔内残留では、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差 (P=0.0006) がみられた (図表 2.10.5、2.10.6)。

したがって、V F ③口腔内残留では、補助具の継続的な使用に改善の傾向がみられた。

図表 2.10.5 V F ③口腔内残留



図表 2.10.6 V F ③口腔内残留 —介入群前後比較—

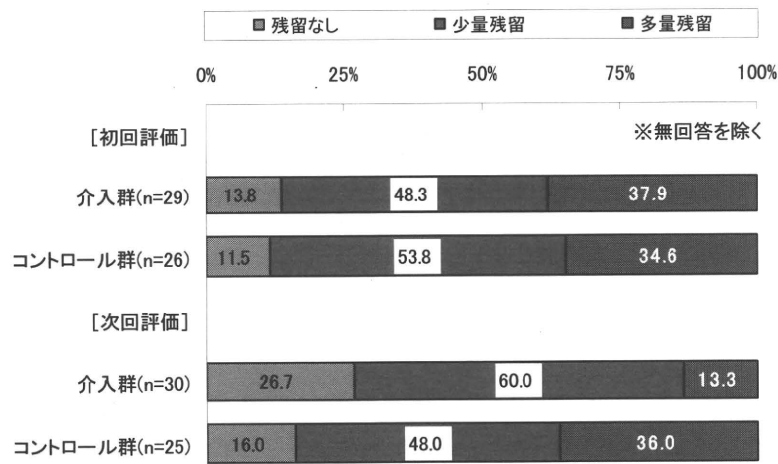
	[次回評価]
[初回評価]	有意差あり (P=0.0006)

#### ④喉頭蓋谷あるいは梨状窩の残留

V F ④喉頭蓋谷あるいは梨状窩の残留では、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差 (P=0.0022) がみられた (図表 2.10.7、2.10.8)。

したがって、④喉頭蓋谷あるいは梨状窩の残留では、補助具の継続的な使用に改善の傾向がみられた。また、「初回評価と次回評価」の比較で、初回評価におけるブローイング秒数が有意に影響しており (P=0.0307)、なかでも、「5～10秒以上」が最も改善に寄与しているといえる (図表 2.10.9)。さらに、次回評価までの期間も有意に影響しており (P=0.0032)、なかでも、「12か月以上」が最も改善に寄与しているといえる (図表 2.10.10)。

図表 2.10.7 V F ④喉頭蓋谷あるいは梨状窩の残留



図表 2.10.8 V F ④喉頭蓋谷あるいは梨状窩の残留 ー介入群前後比較ー

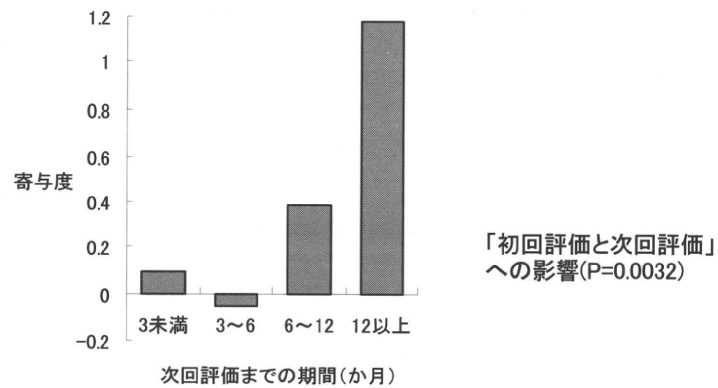
	[次回評価]
[初回評価]	有意差あり (P=0.0022)

また、「初回評価と次回評価」の比較で、初回評価から次回評価までの期間が有意に影響しており (P=0.0032)、「12 か月以上」「6～12 か月未満」の順で、改善に寄与しているといえる (図表 2.10.9)。

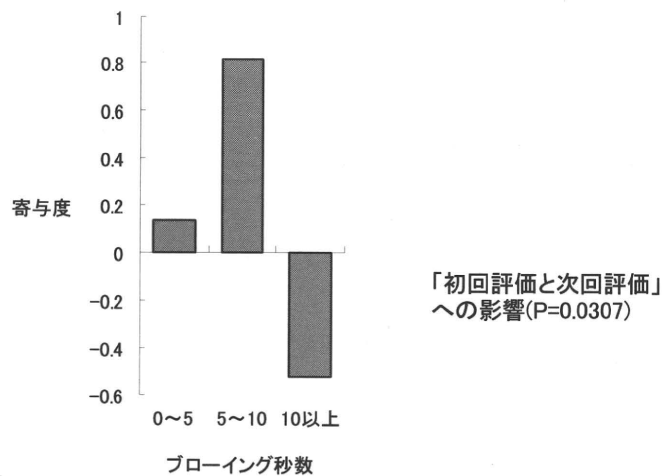
したがって、④喉頭蓋谷あるいは梨状窩の残留では、「6 か月以上」の補助具使用に改善の傾向が示唆された。

さらに、「初回評価と次回評価」の比較で、初回評価におけるブローイング秒数も有意に影響しており (P=0.0307)、なかでも、「5～10 秒以上」が最も改善に寄与しているといえる (図表 2.10.10)。

図表 2.10.9 VF ④喉頭蓋谷あるいは梨状窩の残留 —初回評価から次回評価までの期間での検証—



図表 2.10.10 VF ④喉頭蓋谷あるいは梨状窩の残留 —初回ブローイング秒数での検証—

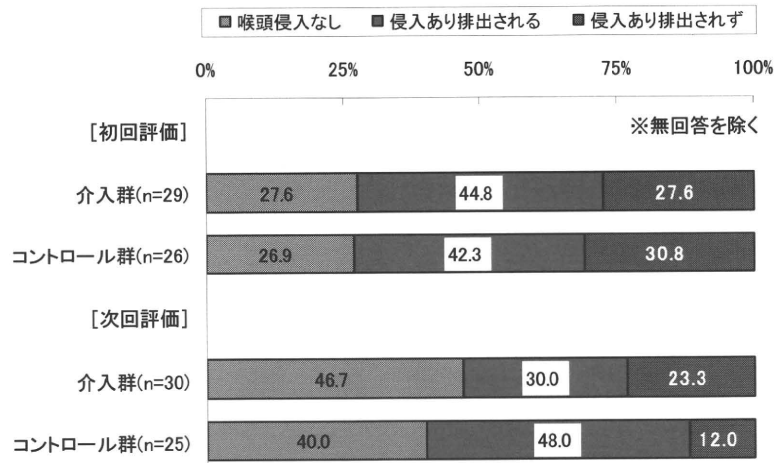


### ⑤喉頭内侵入

V F ⑤喉頭内侵入では、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差 (P=0.0028) がみられた (図表 2.10.11、2.10.12)。

したがって、V F ⑤喉頭内侵入では、補助具の継続的な使用に改善の傾向がみられた。

図表 2.10.11 V F ⑤喉頭内侵入



図表 2.10.12 V F ⑤喉頭内侵入 ー介入群前後比較ー

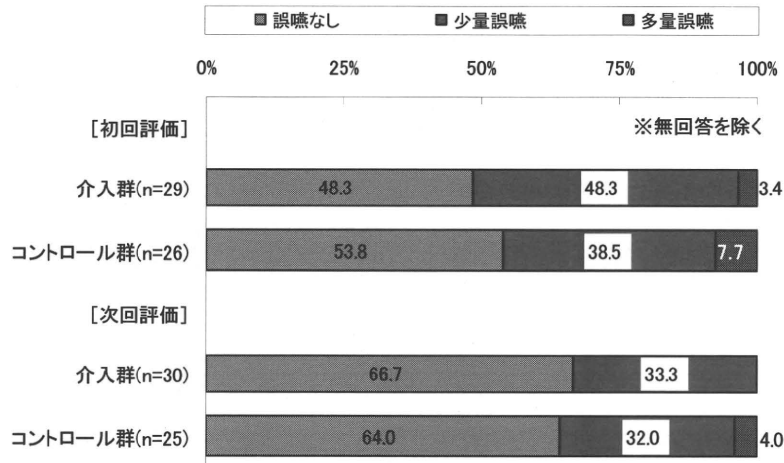
	[次回評価]
[初回評価]	有意差あり (P=0.0028)

⑥誤嚥

V F ⑥誤嚥では、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差 (P=0.0114) がみられた (図表 2.10.13、2.10.14)。

したがって、V F ⑥誤嚥では、補助具の継続的な使用に改善の傾向がみられた。

図表 2.10.13 V F ⑥誤嚥



図表 2.10.14 V F ⑥誤嚥 ー介入群前後比較ー

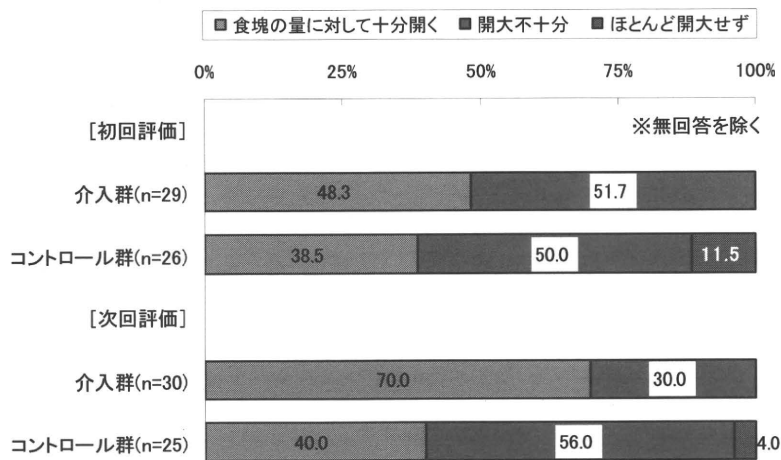
	[次回評価]
[初回評価]	有意差あり (P=0.0114)

⑦食道入口部開大

V F ⑦食道入口部開大では、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差 (P=0.0114) がみられた (図表 2.10.15、2.10.16)。

したがって、V F ⑥誤嚥では、補助具の継続的な使用に改善の傾向がみられた。

図表 2.10.15 V F ⑦食道入口部開大



図表 2.10.16 V F ⑦食道入口部開大 ー介入群前後比較ー

	[次回評価]
[初回評価]	有意差あり (P=0.0114)

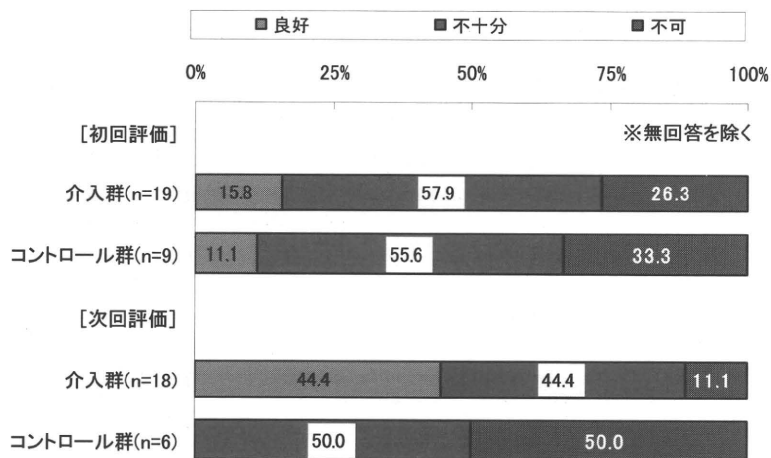
1 1) 嚥下内視鏡検査 (VE)

①鼻咽腔閉鎖

VE ①鼻咽腔閉鎖では、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差 (P=0.0156) がみられた (図表 2.11.1、2.11.2)。

したがって、VE ①鼻咽腔閉鎖では、補助具の継続的な使用に改善の傾向がみられた。

図表 2.11.1 VE ①鼻咽腔閉鎖



図表 2.11.2 VE ①鼻咽腔閉鎖 ー介入群前後比較ー

	[次回評価]
[初回評価]	有意差あり (P=0.0156)

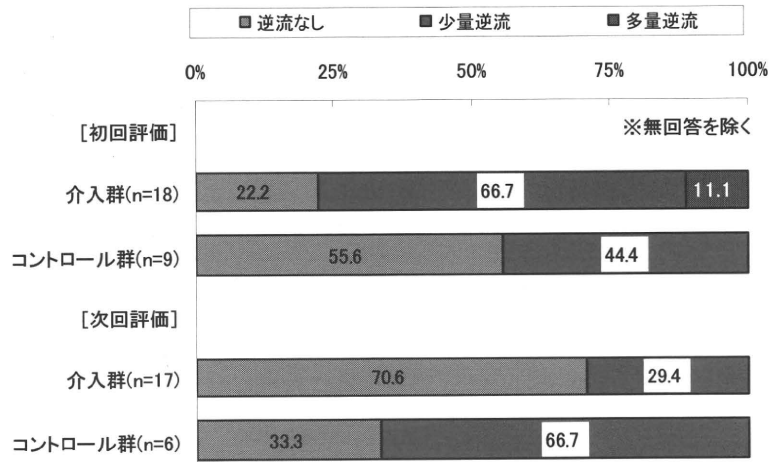


## ②鼻咽腔逆流

VE ②鼻咽腔逆流では、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差 (P=0.0002) がみられた (図表 2.11.3、2.11.4)。

したがって、VE ②鼻咽腔逆流では、補助具の継続的な使用に改善の傾向がみられた。

図表 2.11.3 VE ②鼻咽腔逆流



図表 2.11.4 VE ②鼻咽腔逆流 一介入群前後比較一

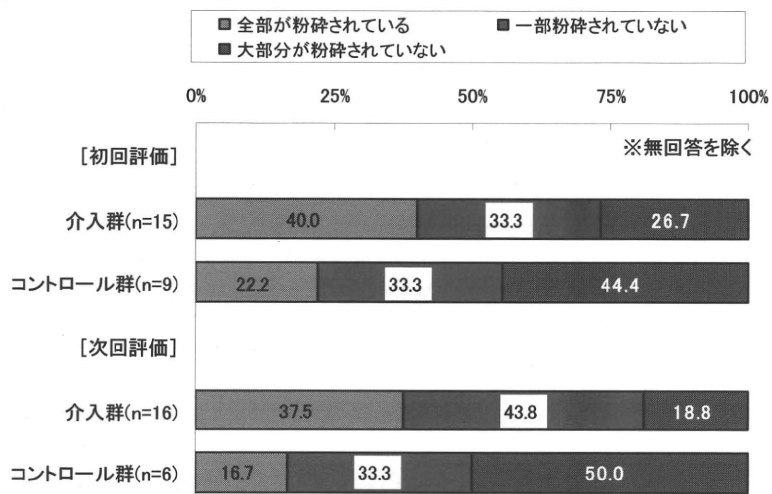
	[次回評価]
[初回評価]	有意差あり (P=0.0002)

### ③咀嚼状態

VE ③咀嚼状態では、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差はみられなかった(図表 2.11.5、2.11.6)。

したがって、VE ③咀嚼状態では、補助具の継続的な使用に改善の傾向はみられなかった。

図表 2.11.5 VE ③咀嚼状態



図表 2.11.6 VE ③咀嚼状態 -介入群前後比較-

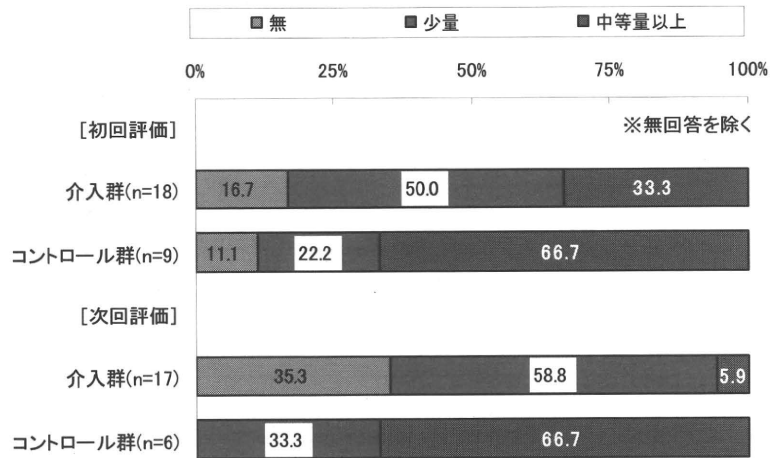
	[次回評価]
[初回評価]	有意差なし

#### ④喉頭蓋谷あるいは梨状窩の残留

VE ④喉頭蓋谷あるいは梨状窩の残留では、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差 (P=0.0038) がみられた (図表 2.11.7、2.11.8)。

したがって、VE④ 喉頭蓋谷あるいは梨状窩の残留では、補助具の継続的な使用に改善の傾向がみられた。

図表 2.11.7 VE ④喉頭蓋谷あるいは梨状窩の残留



図表 2.11.8 VE ④喉頭蓋谷あるいは梨状窩の残留 —介入群前後比較—

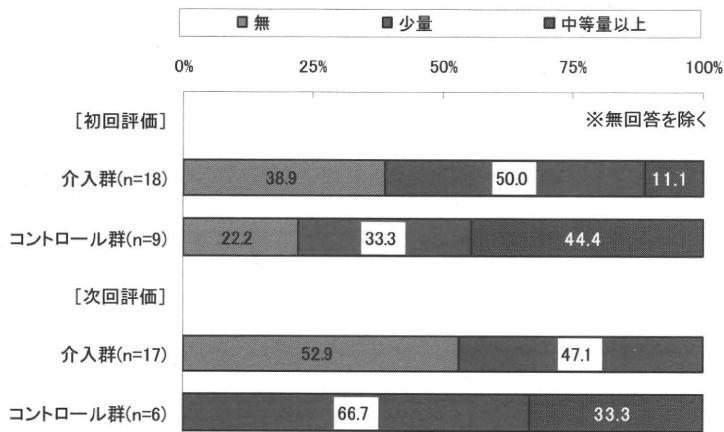
	[次回評価]
[初回評価]	有意差あり (P=0.0038)

⑤喉頭内侵入

VE ⑤喉頭内侵入では、介入群の「初回評価と次回評価」に有意な差はみられなかった（図表 2.11.9、2.11.10）。

したがって、VE ⑤喉頭内侵入では、補助具の継続的な使用に改善の傾向はみられなかった。

図表 2.11.9 VE ⑤喉頭内侵入



図表 2.11.10 VE ⑤喉頭内侵入 —介入群前後比較—

	[次回評価]
[初回評価]	有意差なし